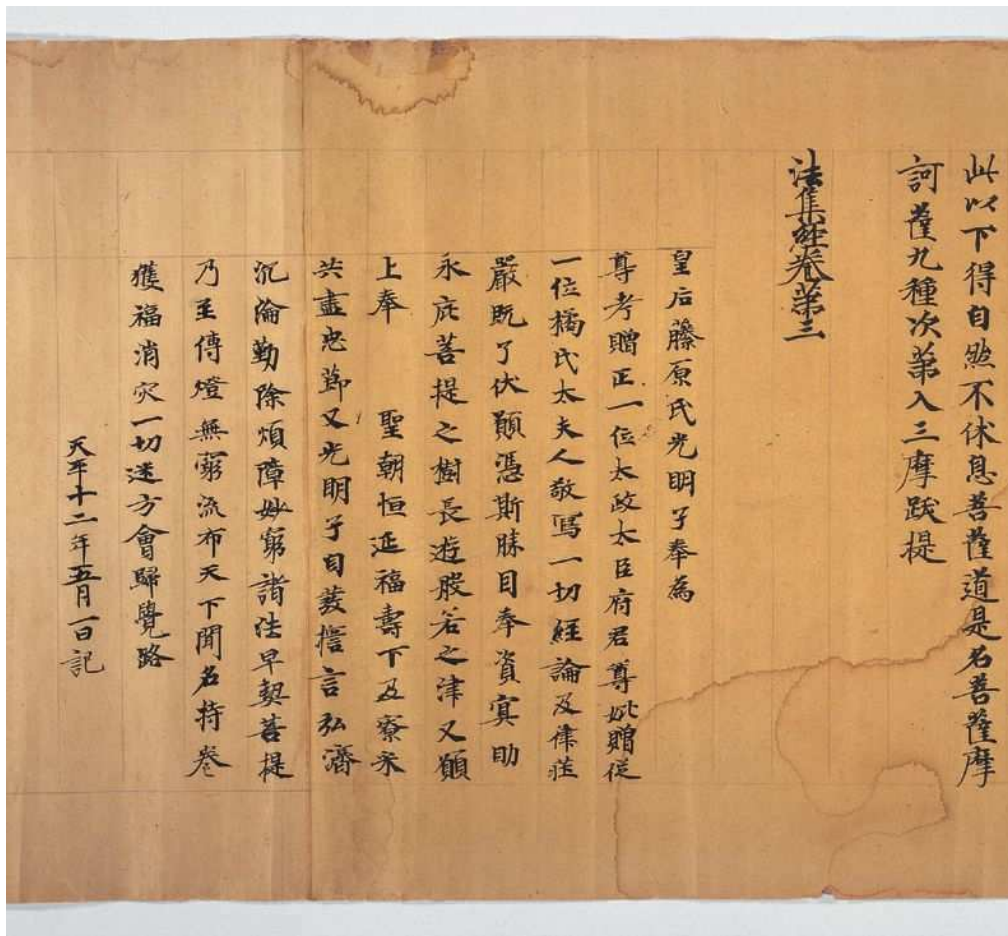


Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第70号

平成21年 7・8・9月



法集經 卷第三〈五月一日經〉(当館) 奥書部分 一平常展「仏教美術の名品」より一

特別展

聖地寧波

日本仏教1300年の源流
～すべてはここからやって来た～

7月18日(土)～8月30日(日)
東／西新館

平常展

仏教美術の名品

本館 通常開館
西新館 9月15日(火)～10月4日(日)

中国古代青銅器

本館 通常開館

特別展

シン ポー

聖地寧波

日本仏教1300年の源流

「すべてはここからやって来た」

会期…七月十八日(土)～八月三十日(日)

主 催…奈良国立博物館、読売新聞大阪本社、NHK奈良放送局
後 援…文化庁、中華人民共和国駐日本国大使館、寧波市人民政府
特別協力…浙江省文物局、上海博物館
協 賛…清水建設、ニッセイ同和損害保険
協 力…日本香堂、仏教美術協会、日本航空、財団法人寧波旅日同郷会、
寧波研究プロジェクトグループ(にんぷろ)

日本と中国の交流の歴史を顧みるとき、中国浙江省の「寧波」という港町が果たした役割は非常に大きなものがあります。

古くは遣唐使の時代、最澄の乗った遣唐使船は当時明州と呼ばれた寧波に着岸していますし、国家間の交流が途絶えた後も、倣然や成尋といった日本僧が先進の仏教を学ぶため商船に乗って中国へ渡り、寧波に至っています。

このように、寧波から中国に入った日本人には、僧侶の名が多くみえます。鎌倉時代に入っても、俊仍、湛海、円爾、そして日本に本格的な禅を移入した栄西や道元らは、みな寧波を訪れています。それは、寧波が港町であるとともに、仏教の町でもあったことと関係します。少し南に離れた台州に中国仏教の一大聖地である天台山を控え、寧波には数々の寺院がありました。なかでも、鑑真和尚が滞在した阿育王寺、寧波沖の島にある普陀山、中国禅宗五山のつである天童寺などは、日本僧の憧れの的でした。

少し後のことになりますが、室町時代に幕府が始めた勘合貿易でも、入港の窓口は寧波でした。また、幕府の正式な遣明使には禅僧が多く任命されており、水墨画で有名な雪舟も遣明使の二行として北京まで往復した僧の一人です。

展覧会のテーマは地名の「寧波」ですが、こうして人物を中心に鑑賞していただくのも一つの方法です。中世の日本人が憧れ、そして見聞し、さらには現地ですてに入れて持ち帰ってきた、仏教美術の世界をお楽しみください。

展示品から

銀阿育王塔

(浙江省杭州市雷峰塔天宮発見)

中国 浙江省博物館所蔵
中国 五代(十世紀後半)
総高二三・五

雷峰塔は、呉越王の銭俶が仏の髪を安置するため、九七〇年代に杭州の西湖畔に建立した七重の磚塔です。この銀阿育王塔は雷峰塔の頂部近くに安置されていました。方形の単層塔で、屋蓋の四隅に特徴ある突起をのせています。目を惹くのは捨身飼虎図などのシヤカの前世の故事を表した彫刻で、そこにはインド風の人物が見られます。銭俶は鑄造製の銅の阿育王塔を八万四千基造立したのですが、それらに比べ本品は銀製で細工が精緻で、また大きさがほぼ二倍であるなど大きな違いがあります。王の発願である雷峰塔にふさわしい阿育王塔の名品と言うことができます。



五百羅漢図

八十二幅
京都 大徳寺所蔵
中国 南宋 淳熙五十五年(一一七八)頃
重要文化財



五百羅漢は、寧波近郊にある天台山の石橋に姿をあらわすと信じられていた羅漢たちです。羅漢は仏教の修行を極めた高僧で宋の頃には信仰の対象となっていました。大徳寺に伝えられたこの五百羅漢図は二幅に五名の羅漢を描いており、もともとは百幅の壮大なセットであったと考えられます。一幅一幅全く異なる図様で、神通力で奇跡を起こす様子や、法要を営む様子などのほか、集団生活をする羅漢たちの日常の一幕もありました。鮮やかな彩色で描き出される羅漢の生き生きとした姿は見るも楽しく、親しみを感ぜさせます。

南宋時代に作られたこの作品は、寧波近郊の銭塘湖近くにある惠安院という寺院におさめられたものでした。画幅に残された金泥銘から製作の詳細な経緯が明らかにあります。

平常展

仏教美術の名品

— 絵画・書跡・考古・工芸 —

西新館

9月15日(火)～10月4日(日)

西新館は、七月・八月は特別展の会場として使用されますが、九月十五日(火)より平常展「仏教美術の名品」絵画・書跡・考古・工芸分野の展示室に戻ります。今回の展示は、十月四日(日)までと期間は短いですが、その分、内容は非常に充実しておりますので、ご期待ください。

なお、今年の十二月から西新館の耐震補強工事が始まるため、西新館での平常展は、当分の間お休みとなります。たいへん申し訳ございませんが、新しい姿となつて再びお客様をお迎えするために、しばしのお暇をご容赦ください。



●金光明最勝王經金字玉塔曼荼羅 第八塔(大長寿院)



◎戒壇院厨子屏絵図像(当館)



◎三鼓銅(手向山八幡宮)

特集展示

東京大学東洋文化研究所の貴重書

9月15日(火)～10月4日(日) 西新館

東京大学の東洋文化研究所には、中国や日本で出版された貴重な典籍が数多く所蔵されています。当館では、二年前より、その一部をお預かりし、展示にも活用してまいりましたが、このたび特集展示を企画し、まとめて出陳することになりました。宋から元、明代の中国での印刷・出版の歴史がたどれるような内容となります。



◎宝珠鈴(当館)



◎三鈷鈴(当館)



◎独鈷鈴(当館)



瑠璃鈕銅製宝幢形経筒(当館)



埴輪犬(当館)

或る邪鬼のルーツ

岩田茂樹（当館学芸部長補佐）

本年四月、中国・河南省を中心とする地域の文化財を見学する機会をえた。河南省の省都鄭州をベースキャンプに、省内および北隣の河北省の一部を含め、石窟寺院等の仏教遺跡を巡ることができた。訪問地にはかねてよりの念願であった南・北響堂山石窟や鞏県石窟が含まれ、筆者にとつてうれしい発見や確認が相つゞ充実した旅であった。

北響堂山や鞏県の石窟で見たかったものに鬼神がある。昨年、奈良国立博物館で開催された「国宝 法隆寺金堂展」には、同寺金堂の日本最古の四天王像が出陳された。この四天王像を背に乗せる邪鬼は非常に個性的なものだ。ふつう邪鬼というと天王像に踏みつけられて苦しげに身をよじることが多いが、法隆寺金堂の邪鬼はともにおとなしい。背中に敷布をかけ、その上に静かに天王像にお乗りいただいているという感じである。

でも本当は、この邪鬼は根っからおとなしいのではなく、おとなしくさせられているのである。腕と足に巻きつく带状のものがあがるが、よく見ると、これは装身具ではなく、手足の自由を奪うための拘束具であることがわかる。猛々しい鬼神の性格は失われていない

わけだ。

この邪鬼は、胸乳がふくらみ、かつめだった太鼓腹でもある。といつて妊娠した女性とは関係ない。実はこの点にこそ、この邪鬼のルーツを解き明かすヒントがある。中国の後漢から六朝時代頃の美術にときおり現れる鬼神が、まさにこのような特徴を示すからである。

上記展覧会のカタログでは、そのような鬼神の代表例として、山東省にある後漢末の沂南漢墓の画像石をあげた。しかしこれと法隆寺邪鬼とでは、その間に四百年以上の時間差がある。そこでもう少しの

ちの作例をさがすと、たとえば北魏時代の鞏県石窟第二窟北壁腰壁や、北斉時代の北響堂山石窟北洞の壁龕や腰壁（写真1）、中心柱四隅のアトラス的役割の鬼神（写真2）、また梁の臨川靖恵王蕭宏（普通四年・五二三、薨去）陵の石碑浮彫などに行きあたる。

そうなると時間差は百年余りにまで縮まる。ただ、これらの鬼神と法隆寺邪鬼との間には表現上の相違もある。



写真2



写真1

中国の鬼神たちには肩のあたりから羽根状のものが生えているが、法隆寺邪鬼にはそれが無い。また前者は手足の指が三本であるが、後者は人間と同じ五本指だ。だがすでにカタログに書いたように、古代の日本人は、鬼神は本来三本指という大原則を知らなかったらしい。平城京の鬼瓦の鬼や、唐招提寺金堂四隅の軒下のいわゆる隅鬼（奈良時代）も、いずれも五本指である。朝鮮・百濟の鬼瓦だと三本指なので、日本だけ写し崩れていることになる。

しかし、今回の旅で知ったのは、中国でもときおりこの原則から外れる場合があるということだ。上記鞏県第二窟腰壁の鬼神のなかにも、三本指のほか、二本指や四本指にくなえ、五本指で弓を引く鬼神の姿（写真3）も認められるのである。

鞏県石窟には学生かと思われるガイド嬢が何人も待機していた。マニュアルどおりだろうと思われる流暢な説明を聞いたあと、「ところでこの鬼の指は何本かご存じ？ 見ないで答えてみて」と言ってみた。案の定、みんな顔を見合わせるばかりで誰も答えられなかったことを報告しておく。



写真3



大威徳明王騎牛像(当館)



出山釈迦立像(当館)



多聞天立像(当館)



虚空蔵菩薩坐像(北僧坊)

平常展

仏教美術の名品

本館 第1・13室

7月～9月

彫刻

第1室

【大和の仏たち】●木造薬師如来立像(元興寺)、●木造薬師如来立像(称名寺)、●木造伝明星菩薩立像(弘仁寺)、●木造虚空蔵菩薩坐像(北僧坊)、●脱活乾漆・木造梵天立像、●脱活乾漆・木造伝教脱菩薩立像(以上、秋篠寺)、●木造持国天立像、●木造多聞天立像、●木造西大門勅額、●銅造誕生釈迦仏立像及灌仏盤(以上、東大寺)、●木造法相六祖像(伝行賀・伝信寂)(興福寺)、●木心乾漆依義淵僧正坐像(岡寺)、●木心乾漆阿閼如来坐像(西大寺)、●木造十一面観音立像(勝林寺)、●木造十一面観音立像(地福寺)、●木造菩薩立像(金竜寺)、●木造十一面観音立像(薬師寺)、●銅板法華説相図(長谷寺)、●銅造薬師如来坐像(当館)、木造天部立像(兵庫県)

第2室

【興福寺伝来の四天王像】

●木造広目天立像(興福寺)、●木造増長天立像、●木造多聞天立像(以上、当館)

【観音菩薩】

●木造観音菩薩立像(観心寺)、●木造観音菩薩立像セゾン現代美術館、●木造千手観音立像(妙法院)、●木造十一面観音立像(元興寺)

【迎講の阿弥陀仏】

●木造阿弥陀如来立像(裸形像)(浄土寺)

第3室

【光背の美】●木心乾漆光背(聖林寺)、●木造光背(當麻寺)

【注目の逸品】

●木造獅子・象

個人蔵
木造・彩色・玉眼 鎌倉時代(13世紀)



【薬師如来と十二神将】●木造薬師如来坐像(当館)、●木造十二神将立像(東大寺)

第4室

【ガンダーラの彫刻】石造菩薩立像、石造仏伝図浮彫(以上、当館)

【中国石窟寺院の仏像】石造如来頭部(雲岡)、石造菩薩頭部(鞏県)、石造菩薩頭部(響堂山)、石造螺髻像頭部(響堂山)(以上、個人)

【中国・朝鮮半島・金銅仏】銅造誕生釈迦仏立像、銅造押出五尊仏、銅造供養者坐像、銅造菩薩坐像、銅造力士立像、銅造力士立像、銅造力士立像、銅造観音菩薩立像(以上、個人)、銅造・仏並坐像(当館)、銅造如来立像(光明寺)、銅造如来立像(当館)

第5・6室

【中国の仏像】●石造十一面観音立像、●石造三尊仏像(以上、当館)、木造菩薩坐像、石造如来坐像、●木造諸尊仏像、●石造三尊仏像、石造仏五尊像、石造仏立像、石造仏浄土碑像(以上、個人)

第7室

【檀像】●木造十一面観音立像(海住山寺)、●木造弥勒仏坐像(東大寺)、●木造観音菩薩立像(本山寺)、●木造十一面観音立像(当館)

第8室

【金銅仏】●銅造誕生釈迦仏立像(正眼寺)、銅造観音菩薩立像、銅造観音菩薩立像(以上、当館)、●銅造菩薩立像(法起寺)、銅造菩薩立像(興福院)、●銅造観音菩薩立像(観心寺)、●銅造菩薩半跏像(神野寺)、●銅造菩薩半跏像(東大寺)、●銅造観音菩薩立像(金剛寺)、銅造観音菩薩立像(個人)

【塑像と埴土】●塑像断片(奈良県薬師寺西塔出土、塑造人物頭部(奈良県本薬師寺出土)(以上、薬師寺)、侍者像(法隆寺塔本塑像)、塑造菩薩頭部(奈良県定林寺出土)(以上、当館)、方形三尊埴土(奈良県川原寺裏山出土)(明日香村)、塑像断片(滋賀県雪野寺出土)(個人)、塑像断片(鳥取県青尾庵寺出土)、火頭形三尊埴土(伝奈良県橘寺出土)、小型独尊埴土(三重県夏見庵寺出土)、六角形埴土(三重県天華寺跡出土)(以上、当館)、多宝塔埴土(中国)(個人、方形独尊埴土(中国)(当館)

第9室

【釈迦如来】木造釈迦如来坐像(法隆寺)、●木造釈迦如来坐像(東大寺)、木造出山釈迦立像、●木造釈迦如来立像(清涼寺式)(以上、当館)、●銅造誕生釈迦仏立像(悟真寺)、銅造誕生釈迦仏立像、銅造誕生釈迦仏立像(以上、当館)

【阿弥陀如来】木造阿弥陀如来坐像(当館)、木造阿弥陀三尊立像(峰定寺)、木造阿弥陀如来立像(個人)、木造阿弥陀如来坐像(西大寺)、木造阿弥陀如来坐像(宝冠阿弥陀)(安楽寿院)

第10室

【地藏菩薩】木造地藏菩薩立像(十市町自治会)、●木造地藏菩薩立像(東大寺)、木造地藏菩薩立像(新薬師寺)、●木造地藏菩薩立像(長命寺)

第11室

【大日如来】木造大日如来坐像(元興寺町)、木造大日如来坐像(西城戸町)

【聖徳太子像】●木造聖徳太子立像(成福寺)、木造南無仏太子立像(法起寺)、木造南無仏太子立像(西大寺)、木造南無仏太子立像(当館)

【大將軍神像】●木造大將軍神坐像(大將軍八神社、木造大將軍神坐像(当館)

第12室

【動物彫刻】●木造狛犬(手向山八幡宮)、●木造狛犬、木造牛頭、木造獅子(以上、当館)

第13室

【明王像】木造五大明王坐像、銅造不動明王立像、銅造大威徳明王騎牛像、●木造愛染明王坐像(以上、当館)、木造不動明王立像(個人)

【天部像】木造四天王立像(現光寺)、●木造十二神将立像(辰・未)(室生寺)、●木造増長天立像(法明寺)

平常展

中国古代青銅器 坂本コレクション

本館 第14・15室

中国古代の商(殷)から漢時代に製作された、青銅器の逸品を展示しています。

爵、觚、罍、長頸尊、觚形尊、方彝、卣、鬲、鼎、鬲、鬲、鬲、豆、盤、匜、盃、甗、鐘、鈃、扁壺、蒜頭壺、甗、鎛、博山炉、鎮子、鏡、鍔など(当館)



◎金銅火焰宝珠形舍利容器(海龍王寺)



青磁経筒(当館)



◎金光明最勝王経(西大寺)



◎文殊菩薩像(当館)

平常展

仏教美術の名品

9月15日(火)～10月4日(日)

西新館

注目の逸品

【絵画】◎戒壇院屏絵図像(当館)

【書跡】◎越中国射水郡鳴戸村墓田図(当館)

【考古】青磁経筒・褐釉陶製経筒(出土地不詳)(当館)

【工芸】手拭掛(法華寺)、布薩水瓶(当館)

絵画

法華曼荼羅(下部神社)、五大虚空蔵像(西大寺)、◎十二面観音像(当館)、◎七髻文殊像(宝寿院)、◎文殊菩薩像、◎普賢十羅刹女像(以上、当館)、普賢十羅刹女像(能満院)、◎地藏菩薩像(地藏院)、弥勒来迎図(個人)、◎諸観音図像(当館)、◎戒壇院屏絵図像(当館)、五大虚空蔵菩薩図像(葉師寺)、◎金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅(大長寿院)、華嚴海会善知識曼荼羅、◎華嚴五十五所絵卷(以上、東大寺)、法華経曼荼羅(当館)、◎観音経絵(本土寺)

書跡

奈良時代の写経

法集経卷第三(五月一日経)(当館)、金光明最勝王経(白濟豊虫願経)(西大寺)

特集展示

東京大学東洋文化研究所の貴重図書

琉璃王経音義、宋版道神足無極变化経、宋版礼記釈文(撫州公使庫刊)、宋版史記(建

安黄善夫刊)、宋版唐律疏議、元版唐律疏議(建陽崇化余氏勤有堂刊)、元版新編古今事文類聚外集、廬陵武溪書院刊、元版玉海(慶元路儒學刊)、元版五倫書(劉氏翠巖舍刊)、明版書伝会選(味経堂刊)、明版大明(統志)(以上、東京大学東洋文化研究所)

器(個人)、◎密観宝珠嵌装舍利厨子(般若寺)、◎宝篋印塔嵌装舍利厨子(当館)、◎五輪塔嵌装舍利厨子(不退寺)、◎首懸駄都種子曼荼羅厨子、百万塔(以上、当館)、◎蛇目文梨子地時給三重箱(長谷寺)、◎透彫経筒(万徳寺)、◎透彫華鬘(金色院)、◎幡頭(金色院)、◎種子華鬘(当館)、◎彩色華鬘(靈山寺)、◎透彫華鬘(神照寺)、彩色華鬘(当館)、透彫幡(個人)、◎四大明王五鈴鈴(当館)、◎四天王五鈴鈴(弥谷寺)、五大明王五鈴鈴(当館)、◎密教法具(嚴島神社)、組法具(真光寺)、◎独鈷鈴・三鈴・宝珠鈴(当館)、独鈷杵(松尾寺)、三鈴杵、五鈴杵(以上、当館)、二面器・飲食器(西大寺)、◎鉢・受台(東大寺)、◎仏餉鉢(金剛峯寺)、◎仏餉鉢(都々古別神社)、王子形

考古

注口土器ほか(青森・岩手県出土)(当館)、銅鐸(妙国寺)、◎銅鏡(奈良県天神山古墳出土)、埴輪犬(伝茨城県出土)(以上、当館)、◎栗原寺伏鉢(談山神社)、軒丸瓦(奈良県横井庵寺出土)、軒丸瓦(奈良県山田寺跡出土)、軒丸瓦(奈良県川原寺出土)、軒丸瓦・軒平瓦(奈良県山形庵寺出土)、軒丸瓦(奈良県東大寺出土)(以上、当館)、鬼身文鬼瓦(奈良県葉師寺出土)(京都国立博物館)、鬼面文鬼瓦(伝奈良県荒地瓦窯出土)(当館)、◎山代忌子真作墓誌、行基舍利瓶残欠(以上、当館)、須恵器短頸壺・和銅銭(奈良県明日香村出土)(個人)、灰釉短頸壺・同皿(茨城県石岡市出土)、銅製経筒・松喰鶴方鏡、湖州鏡、銅製六器・銅製花瓶・独鈷杵・白磁合子ほか(山口県長門ノ宮経塚出土)、◎銅板経(大分県長安寺経塚出土)、瓦経(福岡県飯盛山経塚出土)、瑠璃鈕銅製宝幢形経筒(伝北九州出土)(以上、当館)

工芸

◎透彫舍利容器(西大寺)、◎火焰宝珠形舍利容器(海龍王寺)、火焰宝珠形舍利容

【表紙写真解説】 法集経 卷第三(五月一日経)

当館所蔵
紙本墨書 卷子装
縦二六・四cm 長七二・二cm

黄麻紙に薄墨で界線を引き、経文を墨書した奈良時代前期を代表する写経である。図版にみられるように、本品の巻末には、十行にわたる願文と「天平十二年五月一日記」の日付がある。これと同じ願文を持つ写経遺品は、現在二千巻近くが知られ、「五月一日経」と通称される。

五月一日経は、光明皇后(七〇一～七六〇)が父藤原不比等と母県犬養三千代の追善のために発願した二切経である。天平八年(七三六)九月頃、僧玄昉が唐より持ち帰った経巻および經典目録に基づいて、五千巻余りを目標に書写が開始された。天平十二年四月までには三千巻以上が写され、

水瓶、仙蓋形水瓶(以上、当館)、◎螺鈿玳瑁唐草文合子(當麻寺)、柄香炉(高山寺)、火舎(当館)、蓮華形香合(個人)、◎鉄釣燈籠(当館)、◎透彫華鬘(神照寺)、◎黒漆時絵成体箱(万徳寺)、◎黒漆金銅装成体箱(金剛寺)、金銅装蓮華化生文説相箱(個人)、鼓胴(葉師寺)、◎奚妻鼓胴(龍田大社)、◎三鼓胴(手向山八幡宮)、◎桐時絵手箱(熊野速玉大社)

◎国宝 ◎重要文化財
すべての展示において、出陳作品を一部変更する場合があります。

同年五月九日より、すでに書写の終わった経巻の巻末に願文を付け加える作業が始められた。時の中断を経て、天平十四年末までには書写巻数が四千五百巻に達し、翌十五年からは当初予定していた以外の仏典類にも範囲を拡張、写経事業は最終的に天平勝宝八歳(七五六)まで続けられた。総巻数は七千巻に及んだ。

五月一日経には撥型軸が付くが、軸付近にしばしば校正時のメモ書きが残る。五月一日経が官立の写経所において書写され、厳格な校正作業がおこなわれたことは正倉院文書からも知られる。謹直な書体、テキストの正確さ、残存巻数の多さ、丁寧な装丁等、どれをとってもわが国を代表する、切経と言えるであらう。

展示の 現場から

「国宝 鑑真和上展」を終えて

稲本泰生（当館学芸部企画室長）



わが国を代表する寺院建築の一つである国宝・唐招提寺金堂の解体修理事業が平成12年1月に始まって以来、はや十年の歳月が流れた。修理は最終段階を迎えており、いよいよ本年11月に落慶法要が営まれる。

この空前の大修理の意義を全国規模で伝え、支援する企画として、平成13年の東京都美術館を皮切りに各地で開催された「国宝 鑑真和上展」の果たした役割は大きい。東京以降の会場は名古屋・市博物館（14年）、愛媛県美術館（15年）、仙台市博物館（16年）、北海道立近代美術館（18年）、福岡市博物館（19年）、静岡県立美術館（20年）。この間、和上来日千二百五十年に当たる15年には、12月16日に上陸の地である鹿児島県坊津町（現・南さつま市）秋目の鑑真記念館で、ついで鹿児島県歴史センター黎明館で週間、和上像が特別公開された。また長野県信濃美術館でも13年に「国宝 唐招提寺展」が開催され、同寺の貴重な宝物群が一堂に展示された。

奈良国立博物館は、以上全ての展覧会・特別公開に際し、学術協力の任にあたらせていただいた。当館で今春開かれた「国宝 鑑真和上展」は、まさにその集大成となった。今年は唐招提寺の創建千二百五十年、また地元での開催とあつて、修理時に金堂からおろされた東西の鴟尾、礼堂本尊の釈迦如来立像、御影堂障壁画などが特別に出陳された。十年にわたり、この展示プロジェクトを推進された唐招提寺とTBSをはじめとする関係各位のご配慮を得て、内容を著しく充実させることができたのは、望外の喜びであった。

17年に東京国立博物館で開催された「唐招提寺展 国宝鑑真和上像と盧舎那仏」を含めると、修理事業の間に開かれた唐招提寺関係の展覧会には、実に約百五十万人もの来館者があつた。13年以来的、和上像の移動距離は総計約二万二千キロに及ぶ。ともに破格の数字であり、和上ご自身が、勧進に奔走されたとの印象が強い。その求心力が千二百五十年の時を経た今も失われていないことを実感するとともに、和上像の造形が、心の拠り所を求める人々の期待を決して裏切らないことに、思いを新たにす。

筆者は幸運にも、奈良博が関わったほぼ全ての企画に参加させていただき、和上を取り巻く人々の輪に加わって、数々の貴重な経験を積むことができた。緊張の連続だったが、各館スタッフとの共同作業、関係者との交流は楽しかった。長丁場の展示を支えた文化財輸送、展示デザイン、照明担当など、各方面のプロの卓越した技量と、仕事に対する真摯な姿勢に接したことも忘れがたい。様々な場面を思い出すたび、和上像の宝前で幾度となく耳にし、いつしか脳裏にすり込まれた「鑑真大和上和讃」の響きがよみがえってくる。

● 公開講座 ●

特別展「聖地寧波」

7月25日(土)「清涼寺釈迦如来像と東アジアの釈迦信仰」

稲本泰生（当館学芸部企画室長）

8月1日(土)「泉涌寺僧と普陀山信仰—観音菩薩坐像の請来理由」

西谷 功（泉涌寺宝物館学芸員）

8月15日(土)「憧憬の中国仏教—聖地寧波をめぐる人と美術」

谷口耕生（当館学芸部保存修理指導室長）

8月22日(土)「飛帆馳船—蒼波をこえた人々」

藤田明良（天理大学国際文化学部教授）

※各回とも、午後1時30分～3時、当館講堂にて、**先着196名**（午後1時に開場し、講堂入口にて入場券を配布します）。聴講無料。

● サンデー・トーク ●

特別展「聖地寧波」

7月19日(日)「阿育王寺の仏舎利信仰と日本」

内藤 栄（当館学芸部長補佐）

8月16日(日)「貿易陶磁からみる寧波と日本」

吉澤 悟（当館学芸部教育室長）

※各回とも、午後2時～3時30分、当館講堂にて、**先着196名**（午後1時30分に開場します）。聴講無料。

● 第38回 夏季講座「寧波をめぐる信仰と美術」 ●

平成21年8月18日(火)～20日(木)

※詳細はこのページの裏面をご覧ください。

◆奈良国立博物館賛助会

平成21年7月現在、一般会員（個人）27名、一般会員（団体）17団体、特別会員2団体、特別支援会員5団体のご入会をいただいております。新たにご加入いただきました方をご紹介します。

【一般会員（個人）】 鬼頭 守義 様（平成21年6月ご入会）
福田 倫子 様（平成21年6月ご入会）

● 奈良国立博物館+奈良県立大学 合同公開講座 ●

「まなざしの変容 奈良から世界を変える」

主催 奈良国立博物館・奈良県立大学

後援 平城遷都1300年記念事業協会

会場 奈良国立博物館講堂（定員190名）

時間 13:30～16:00（講演各50分／討論40分）

※聴講無料です。9:30より奈良国立博物館新館で整理券を配布します（先着順）

9月6日(日)〈立ち上がる記憶〉

開会挨拶 安村克己（奈良県立大学教授）

「奈良公園に佇む」 井原 縁（奈良県立大学講師）

「大仏に逢う」 西山 厚（当館学芸部長）

討論：井原 縁+西山 厚／西山正憲（奈良県立大学教授）

9月13日(日)〈煌めく祈り〉

「インドより奈良を想う—ヒンドゥー教の祈り—」

中谷哲弥（奈良県立大学教授）

「寧波より奈良を想う—仏への祈り—」

北澤菜月（当館学芸部研究員）

討論：中谷哲弥+北澤菜月／堀田新五郎（奈良県立大学准教授）

9月20日(日)〈揺さぶられる心〉

「奈良から世界を見わたす」 安村克己（奈良県立大学教授）

「奈良の仏像とその源流をさぐる」 岩田茂樹（当館学芸部長補佐）

討論：安村克己+岩田茂樹／吉澤 悟（当館学芸部教育室長）

閉会挨拶 西山 厚（当館学芸部長）

◆キャンパスメンバーズ

平成21年7月現在、26大学等のご入会をいただいております。新たにご加入いただきました大学等をご紹介します。

京都文教大学・京都文教短期大学（平成21年6月ご入会）

国宝 蛇目文蒔絵三重経箱

1合
室町時代(14～15世紀)
奈良 長谷寺

経典は仏陀の**ことば**を記した聖典として、古来**舍利**と同等に大切にされてきた。そのため経典を美しく装飾することが行われ、経典を納める箱や帙なども工芸技術の粋を凝らして荘厳された。

これは法華経など34巻の経巻を収納する三重の経箱。木製で黒漆を塗り、蒔絵や銀板で加飾している。この経箱の魅力は、内外面の装飾意匠にある。外面は器面を斜めに横切る線を引き、地の部分を金色、やや粗く金粉を蒔いたもの、金箔を蒔いた砂子風の三種に分け、その上にドーナツ状の文様を散らしている。このような器面をまったく違う意匠で分割する手法は、衣の右と左を違う裂で仕立てる「片身替わり」と呼ばれる染織技法より影響を受けたもので、漆工品では室町時代から桃山時代にかけ流行した。一見、仏教を感じさせない外見であるが、紐金具には

仏具の一種である輪宝が**あしら**われている。小さなところではあるが、経典の収納にふさわしい意匠を盛り込んだのであろう。

蓋を開けると、黒漆地に蒔絵で蝶と飛鳥を散らした文様が現れる。流行を取り入れた外面の意匠とは一転して平安風のおもむきがあり、このギャップがなかなか楽しい。

内藤 栄(当館学芸部長補佐)

※西新館 平常展にて9月15日～10月4日に展示



第38回 夏季講座 「寧波をめぐる信仰と美術」

日程：平成21年8月18日(火)～20日(木)
主催：奈良国立博物館
奈良女子大学古代学術研究センター
会場：奈良女子大学講堂(近鉄奈良駅から徒歩約5分)

第1日

8月18日(火) 受付9:30～／開会10:30～

- ① 東アジア海域交流のなかの寧波
小島 毅氏(東京大学大学院教授)
- ② 寧波仏画の故郷(ふるさと)
井手誠之輔氏(九州大学大学院教授)
- ③ 宋代明州の浄土教
佐藤成順氏(大正大学名誉教授)

第2日

8月19日(水) 受付9:00～／講座開始9:20～

- ① 鎌倉仏教からみた中国-宋代仏教と日宋外交-
横内裕人氏(文化庁美術学芸課調査官)
- ② 憧憬の宋代彫刻
藤岡 穰氏(大阪大学大学院教授)
- ③ 十王図をめぐる
梶谷亮治氏(東大寺総合文化センター設立準備室長)
- ④ 出会いと別れ-東アジアの雅集図・送別図
板倉聖哲氏(東京大学東洋文化研究所准教授)

第3日

8月20日(木) 受付9:00～／講座開始9:20～

- ① 「渡来僧の世紀」から「造明船の時代」へ
伊藤幸司氏(山口県立大学准教授)

② 寧波からもたらされたもの-特別展への招待 北澤菜月(当館研究員)

※20日午後は、奈良国立博物館において特別展「聖地寧波-日本仏教1300年の源流」見学(17:00まで)

会場：奈良女子大学講堂(近鉄奈良駅から徒歩5分)
参加費：3,000円
※ テキスト代などを含みます。受付け決定後に振り込んでいただきます。
定員：400名
※ 応募多数の場合は奈良国立博物館友会の会メンバーを優先し、なお多数の場合は抽選で決定します。
応募方法：(往復はがき)による。郵送に限ります。
※ 「夏季講座参加希望」と書き、[氏名・住所・郵便番号・電話番号・性別・年齢]を明記して下さい。
奈良国立博物館友会の会メンバーの方は、友の会カード番号もお書きください。
※ 返信用はがきには宛名を記入してください。
※ はがき1枚につき申込者1名としてください。
応募締め切り：7月24日(金) 必着
※ 受付けの可否を7月31日(金)までにご連絡します。
問い合わせ先：教育室 電話 0742-22-4464
FAX 0742-22-7221

開館予定(7月～9月)

■開館時間

午前9時30分～午後5時
※毎週金曜日と8月13日(木)～16日(日)は、午後7時まで
※入館は、閉館の30分前まで

■休館日

月曜日
※7月20日(祝)、8月17日、9月21日(祝)は開館し、7月21日(火)と9月24日(木)は休館

平成21年4月より、高校生および18歳未満の方も、平常展を無料で観覧できるようになりました。
(東京・京都・九州の各国立博物館、飛鳥資料館も同様です。)

観覧料金

□特別展「聖地寧波」

	一般	高校・大学生	小・中学生
個人	1,200円	800円	500円
団体・前売	1,000円	600円	300円

※この料金で、平常展(本館)もご覧になれます。

□平常展

	一般	大学生
個人	500円	250円
団体	400円	200円

※高校生以下および18歳未満、70歳以上の方は無料です。

※団体は責任者が引率する20名以上です。
※障害者手帳をお持ちの方(介護者1名を含む)は無料です。
※毎月22日は「夫婦の日」として、ご夫婦で観覧される方は一般料金の半額で観覧できます。(特別展・平常展ととも)



[交通案内] 近鉄奈良駅下車徒歩約15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神社・国立博物館」下車

※当館には駐車スペースがございませんので、最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用ください。



奈良国立博物館
Nara National Museum

〒630-8213 奈良市登大路町50(奈良公園内) TEL. 0742-22-7771 FAX. 0742-22-7221 テレホン・サービス 0742-22-3331 ホームページ(URL) <http://www.narahaku.go.jp/>

「奈良国立博物館だより」は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒を同封して、当館の情報サービス室にお申し込みください。
※返信用封筒には宛名を明記し、長形3号の場合は90円切手を、角形2号の場合は120円切手を貼付してください。